

「ではけっしてない(nie)」か「でしかない(nur)」か：マルクスの筆跡の解析と使用例の調査とによって

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

71

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

46

(発行年 / Year)

2004-03-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003206>

「ではけっしてない (nie)」か 「でしかない (nur)」か

—マルクスの筆跡の解析と使用例の調査とによって—

大谷 禎之介

目 次

1. 問題の所在
2. マルクスの筆跡
3. マルクスの使用例
むすび

1. 問題の所在

本稿の直接の課題は、『資本論』第2部のエンゲルス版のなかで nie と なっている一語が、マルクスの第2部草稿のなかでは nur と なっていることを、この語の前後の草稿部分でのマルクスの筆跡の解析とマルクスによるこの語の使用例の検討とによって明らかにすることである。

このような、些末と見えるかもしれない「穿鑿立て」が必要であるのは、第1に、この語を含む文章が、恐慌論と再生産論との関連についてのマルクスの理論的展開を理解するうえでの一つの重要なカギと考えられてきていたものだからであり、しかも第2に、本稿の表題にも掲げたように、nie は「……ではけっしてない」という意味の語であり、nur は「……でしかない」という意味の語であって、当該の一語をこのどちらと読むかによって、この語を含む文章がまったく逆の意味をもつこととなる

からである。

なぜこの一語とそれを含む文章とを問題にしなければならないのか、ということについては、2002年5月25日に開催された、マルクス・エンゲルス研究者の会主催の恐慌論シンポジウムのさいに、事前に配布された筆者のコメント（その全文は拙稿「再生産論と恐慌論との関連をめぐる若干の問題について」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第40号、2003年9月、のなかに掲げた）に書いたし、また、拙著『マルクスに拠ってマルクスを編む』（大月書店、2003年9月）の「あとがき」でも触れたが、ここでもその要点は繰り返しておく必要があろう。

『資本論』第2部のエンゲルス版の注32は、長い間、マルクス自身がいわゆる「内在的矛盾」——資本主義的生産様式に内在する生産と消費との矛盾——の問題を第2部第3篇の再生産論のなかで論ずべきことを明記した箇所と見なされていた。それは、この注のなかでマルクスは「生産と消費との矛盾」を指摘したうえで、「けれども、このことは次の篇ではじめて問題になることである。[Dies gehört jedoch erst in den nächsten Abschnitt.]」と書いているのであって、この「次の篇〔Abschnitt〕」とは当然に第2部第3篇を指すものと見なされたからであった（以下、引用中の下線はすべて引用者）。

筆者は、「マルクス経済学レキシコンの栞」第6号（久留間鮫造編『マルクス経済学レキシコン』第6巻「恐慌Ⅰ」、大月書店、1972年9月）で、編者久留間氏に代わって、「「恐慌Ⅰ」の編集をめぐる——各項目の意味と内容——」と題する解説を書いたが、そのなかで、この注32でのマルクスの記述について、久留間氏の主張にもとづき、この注でマルクスが「次の Abschnitt」と書いているのは、内容からすれば、第2部第3篇ではなくて第3部のことだったと考えられる、と書いた。そしてそれからまもなく、拙稿「「内在的矛盾」の問題を「再生産論」に属せしめる見解の一論拠について——『資本論』第2部注32の「覚え書き」の考証的検討——」（『東洋大学経済研究所研究報告』第6号、1973年）で、Abschnittは、部

一篇一章一節といった篇別構成のうちの「篇」を（また時として「節」を）意味するだけでなく、篇別構成のどの段階であろうと一つの「区分」ないし「項目」として Abschnitt と呼びうること、最も広くは「部分」という意味に使われうることを明らかにし、そのうえで、「次の Abschnitt」が『資本論』の篇別構成のうちのどの部分を指しているのか、ということは、この注で「このこと」とされていることの内容が、『資本論』のこれに続く諸部分のうちのどこで理論的に論じられているのか、ということによって判断されるべきだ、と述べた。この拙稿を発表したのち、注 32での「次の Abschnitt」が第2部第3篇を指しているということを前提かつ論拠にして「内在的矛盾」の問題が第2部第3篇の再生産論に属するとする主張はぱったりとなくなった。

ところがその後、エンゲルスがこの注に利用したマルクスの第2部第2稿の当該部分を見ることができるようになり、草稿でマルクスは、「けれども、ここでの話のいっさいが次の Abschnitt ではじめて問題になることである。(Diese ganze Geschichte jedoch gehört erst in d. nächsten Abschnitt.)」と書いたのちに、Abschnitt を Kapitel に修正していることがわかった¹⁾。3章構成からなる第2稿のなかでの「次の章 [Kapitel]」が第3章を指すことは確実なので、エンゲルスは、3篇構成からなる彼の版での篇別に合わせて、「次の章 [Kapitel]」を「次の篇 [Abschnitt]」に変更していたのであった。

これによって、上記拙稿での、「次の Abschnitt」は第2部第3篇をも第3部をも意味するのであって、どちらを意味するかはこの注の内容から読み取られるべきものとする結論、また同稿の末尾近くで述べた「エンゲルスによる書き替えの可能性はないであろう」とする推論が誤りである

1) Abschnitt を Kapitel に変更したのがマルクスであることについては、これまで疑問が出されたことはない。念のために言えば、この Kapitel の筆跡がマルクスによるものであることは、たとえば彼が第2章や第3章のタイトルで書いている Kapitel の筆跡と対比して見ただけでも、明らかに同一人によるものであることから確認できるのである。

ことが明らかとなった。

だから、「次の Abschnitt」がどこを指すのか、ということについて言うかぎり、筆者による「栗」のなかでの主張も、上記拙稿での結論も訂正されなければならない。

けれども、このことによって注32が、第2部第3篇で「内在的矛盾」の問題を論じることにしている、とマルクス自身が述べた箇所として確定できるようになったわけではなかった。

というのは、マルクスの草稿を見ることができるようになって、同時に、「内在的矛盾」についてマルクスが書いていると考えられてきた箇所のなかに、エンゲルスが解説を誤ったために、意味が正反対になってしまっている箇所があることがはじめて分かったからである。

草稿の「ここでの話のいっさい」あるいはエンゲルス版の「このこと」のなかに「内在的矛盾」の問題が含まれているとされてきた根拠は、エンゲルス版での次の一文の下線部分にあった。レーニン以来、必ず引用されてきたのが、注32のなかの以下の記述である。

「さらに次の矛盾。資本主義的生産がそのすべての力能を發揮する諸時期は過剰生産の時期であることが明らかとなる。なぜなら、生産の諸力能は、それによって価値がより多く生産されうるだけでなく実現もされうるというように充用されることはけっしてできないが、商品の販売、商品資本の実現は、だからまた剰余価値の実現もまた、社会一般の消費欲求によってではなく、その大多数の成員がつねに貧乏でありまたつねに貧乏のままであらざるをえないような社会の消費欲求によって限界を画されているのだからである。〔weil die Produktionspotenzen nie so weit angewandt werden können, daß dadurch mehr Wert nicht nur produziert, sondern realisiert werden kann; der Verkauf der Waren, die Realisation des Warenkapitals, also auch des Mehrwerts, ist aber begrenzt, nicht durch die konsumtiven Bedürfnisse der Gesellschaft

überhaupt, sondern durch die konsumtiven Bedürfnisse einer Gesellschaft, wovon die große Mehrzahl stets arm ist und stets arm bleiben muß.])」(MEW. Bd.24, S.318, 下線および太字は引用者。以下すべて同様。)

これによれば、「価値がより多く生産されうるだけでなく実現もされうる」ということと、資本主義的生産のもとであらゆる制限を乗り越えて押し進められる「生産の諸力能の充用」とが矛盾する、ということ、つまり「内在的矛盾」の両項とその対立とが指摘されていると読めるのであって、この読み方にもとづいて、マルクス自身が「内在的矛盾」の問題は「次の篇で問題となる」と書いていたと考えられてきたのであった。

ところが草稿では後半の部分は次のようになっている。

「なぜなら、生産の諸力能は、それによって剰余価値が生産されうるだけでなく実現もされうるかぎりにおいて充用されることができるだけであるが、商品資本の実現（商品の販売）は、だからまた剰余価値の実現もまた、社会の消費欲求によってではなく、その大多数の成員がつねに貧乏でありまたつねに貧乏のままであらざるをえないような社会の消費欲求によって限界を画され、制限されている等々だからである。
[weil d. Produktionspotenzen **nur** so weit anzuwenden, als dadurch nicht nur *Mehrerth* producirt, sondern *realisirt* werden kann; d. Realisation (Verkauf d. Waaren) d. Waarenkapitals, also auch d. Mehrerths aber *begrenzt, beschränkt* ist nicht durch d. *consumtiven* Bedürfnisse d. Gesellschaft, sondern durch d. *consumtiven* Bedürfnisse einer Gesellschaft, wovon d. grosse Mehrzahl stets *arm* ist u. *arm* bleiben muß.])」(Kapital, II. Ms. II. S.118. イタリックは原文での強調。以下もすべて同様。以下、第2稿の引用はすべてMEGA, II/11.1のためのTextによる。)

エンゲルス版との決定的な違いは、上の引用で筆者が太字にした同版で *nie* となっているところが、草稿では *nur* だという点である。「生産の諸力能は、それによって剰余価値が生産されうるだけでなく実現もされうるかぎりにおいて充用されることができるだけである」というマルクスの記述が、剰余価値の実現が生産諸力能の充用を制約することを言っていることは一見して明らかである。ここでは、生産の諸力能は剰余価値の実現が可能なかぎりにおいてしか充用されえないのであり、しかもその剰余価値の実現は、大衆の貧困を伴う社会の消費欲求によって限界を画されている、ということが述べられているのであって、「生産諸力を、その限界をなすものがあたかも社会の絶対的な消費能力でもあるかのように発展させようとする、資本主義的生産様式の衝動」(MEGA, II/4.2, S.540)、つまり価値および剰余価値の実現という制限と対立しそれを突破して進んでいくその対立項についてはまったく触れられていない。エンゲルスが *nur* を *nie* と読んだ結果、下線部に見られるとおり、文意はまさに正反対になってしまっていたのであった。

もし、エンゲルス版での *nie* となっている箇所をマルクスが *nur* と書いていたとするなら、この箇所ではマルクスは、価値および剰余価値の実現が生産諸力能の充用を制約する、という事実を述べていたということになるが、価値および剰余価値の実現による、生産諸力能の充用の制約を真っ正面から問題にしているのは、まさに第2部第3篇である。だから、この関連が「次の Abschnitt」である第3篇で「はじめて問題になる」のもまったく当然のことである。

要するに、マルクスの草稿によって明らかとなったのは、少なくとも当該部分について言うかぎり、そこでは「内在的矛盾」——その両項とそれらの対立——について述べられてはいなかったのだ、ということであり、だからまた当該部分を、「内在的矛盾」の問題は第3篇に属する、とマルクス自身が明言している箇所と見なすことができない、ということだ

ったのである。

筆者は、拙稿「『信用と架空資本』の草稿について (上)」(『経済志林』第51巻第2号, 1983年, 43-45ページ)で、モスクワからもらった解説文にもとづいてこの点を指摘し、「ここでは剰余価値の実現による生産の制約について述べられているとすれば、それこそまさに、「第3章 流通過程および再生産過程の実体的諸条件」, すなわちのちの第3篇の問題なのだ」と述べておいた。

しかし、1983年に行ったこの指摘は、マルクスの草稿とエンゲルス版とでは意味が逆になっていることについても、この逆転を認めれば、注のうちの少なくともこの部分について言うかぎり、ここでのマルクスの言明を、「内在的矛盾」の問題が「次の Abschnitt」の第3篇に属するとする論拠にすることができなくなる、という点についても、その後、誰によっても顧みられることはなかった²⁾。富塚良三氏は『資本論体系』第4巻「資本の流通・再生産」(有斐閣, 1990年)で、「この箇所は、ML研究所の解説原稿では、„……weil die Produktionspotenzen nur soweit (ママ) anzuwenden,……“ となっているが、この nur は nie でないと文意が前後撞着するかと思われる」(294ページ)、と注記されてはいたが、氏が本文のなかで原文として掲げられたものでは、問題の一語を nie とされたものであった。

2002年5月25日に開催されたさきのシンポジウムでは、発言希望者があらかじめ提出していた発言要旨をまとめた「コメント集」が作成された。前述のように筆者はそのなかで、上述の見解を書いておいたが、この「コメント集」を読まれた富塚氏は、会場で配布された回答のなかで、筆者の指摘にたいして筆者を批判され、この違いについて氏の見解を述べられ

2) ただし、1997年12月に刊行された新日本出版社版の『資本論』第2部では、注32の問題の箇所、「覚え書きのドイツ語文中の nie は、草稿では nur であり、「決して使用されえない」は「という限りでのみ使用されうる」と判読できる可能性もある」という訳者注がつけられていた。

た。その要点は、〈nur と読んでも読めなくはないだろうが、文章の流れとして不自然なように思われる。nie と読んだ方が前後の文章ともうまくつながって良いのではないか、それに、これを nur と読んだからと言って、この文章が全体として「生産と消費の矛盾」を述べたものであること自体は変わりはないのではないか〉、いうことであった。

その後、富塚氏は「再生産論の課題〔Ⅲ〕」（『商学論纂』第44巻第2号、2002年12月）で、あらためてこの問題について立ち入って議論されている。そこで氏が述べられているのは、結局のところ、シンポジウムでの上の回答と同じく、前後の文脈から理論的に整合的な推論をすれば、nie と読むべきところなのであって、その点で筆者の主張は説得力を欠いている、ということである。

ただ、そのなかで、筆者が最初は nur であると断定していなかったのに、のちには次第に断定的な論調となり、ついには断定することになっている、と筆者の論調の変化を指弾されている。これについてだけは、ここで一言しておかなければならない。

たしかに筆者は、「「信用と架空資本」の草稿について（上）」では、次のように書いていた。

「わたくしは社会史国際研究所で、草稿118ページのオリジナルをまえに、研究員のランカウ氏と nur か nie かを話し合った。ランカウ氏は、自分には nur にしか見えないが、どう読むかはあなたが判断することだ、と言っていた。この個所を倍率の高い拡大鏡で見写しとり、他の個所の多くの nie および nur と比べてみたりもした。その結果、こゝだけをとってみれば nur と読むほかはないだろうという判断に達した。しかし、前後関係から nie と読むべきだということになったときに、nie と読むことは絶対にできない、と主張することができるほど確実なものではない。」（『経済志林』第51巻第2号、1983年、45ページ。）

このときには、アムステルダムから帰国して、オリジナルを見ることができないうちなかで、アムステルダムで行った調査とそれにもとづく判断について書いたのであった。じっさい、アムステルダムでは、小生の力不足もあって、必ずしも十分に調査できたわけではなかったのである。しかし、その後、『マルクス経済学レキシコン』の編集作業のなかで、大原社会問題研究所に、社会史国際研究所から交換資料として送られてきた第2稿の photocopy が所蔵されていることが判明し、時間をかけてこれを仔細に調べることができた。あらためて、第2稿の全体を入念に検討し直した結果、問題の一語は nur と読むほかはない、という結論に達し、それにもとづいて、2002年のシンポジウムでの「コメント集」を書き、またその後には、『マルクスに拠ってマルクスを編む』での「あとがき」を書いたのであった。そのような事情をどこでも説明しなかったために、富塚氏から指弾を受けることになったのであって、この点については富塚氏にご諒解を求めておこう。

それはともかくとして、その後さらに、nie か nur かというこの問題をあらためて洗い直して、筆者のこれまでの判断を再点検することを迫る、思いがけない出来事が続けざまに生じた。じつは、できるだけ早くこの論稿を書かなければならない、と決断させたのは、それらの出来事だったので、それについて触れておかなければならない。

ほかでもすでに書いているように、現在、国際マルクス=エンゲルス財団の日本 MEGA 編集委員会が引き受けている MEGA の編集作業の一つに、『資本論』第2部草稿のうちの第2稿～第8稿を収める MEGA 第2部第11巻の編集がある。これは、第2稿を収める前半をモスクワのリュドミーラ・ヴァーシナが、それ以降の諸草稿を収める後半を筆者が担当し、両人が共同編集者としてこの巻の責任をもつことになっているものである。また、『資本論』第2部については、大村泉氏を代表とする仙台グループが、エンゲルス版とそれの編集原稿とをそれぞれ収める MEGA 第2部第13巻および第12巻の編集に当たっている。

仙台グループの作業には、ヴァーシナと筆者とが担当する第11巻の最終テキストが必要なので、仙台グループからはその引き渡しをせつつかれていたが、小生の作業が進まないことが最大の原因でその引き渡しが遅れていた。ようやく、2003年9月に京都で開かれた仙台グループの会合の場で、ヴァーシナとともに MEGA 第2部第11巻全体のテキストを渡すことができた。ところが、その直後に、大村泉氏が見過ごすことのできない重大な発言とデモンストレーションとを行ったのである。

氏は、MEGA 編集者にとっても外部の研究者にとっても、CD-ROM 版によって草稿の鮮明な画像を公開することがどんなに重要な意味をもつか、ということの例示として、第2部注32のなかの問題の一語を取り上げ、OHP を使って第2稿の当該ページの電子映像を示しながら、この語が nie としか読むことができないことはこの鮮明な画像によれば明らかになるのだ、と主張したのである。この主張は、直接には CD-ROM 版作成の意義の例示というかたちを取ってはいたが、この部分を含む第2稿編集の担当者であるヴァーシナ作成のテキストについて、そのなかで当該の語を nie としているのは誤った解説だ、とするものであった。そしてまた、nie はエンゲルスの誤解説であってこれは nur と読むべきだ、とする筆者の見解にたいして、誤った解説によっていたのであって、投射された鮮明な画像によれば、そのような主張が成り立たないことは明らかだ、と筆者を批判したのである。これは、ヴァーシナと筆者とが共同で責任をもつべき第2部第11巻の、その直前に渡したばかりのテキストの内容にたいするあからさまな批判であった。大村氏のこの場での発言は日本語だけで行われたので、ヴァーシナは、大村氏がなにを言っているのか正確には理解できず、その場で反論することがまったくできなかつた。ただ筆者だけが、当該箇所^の解説はヴァーシナが初めて行ったものではなく、モスクワでの先人の解説作業を受け継いだものであって、その全体にたいするそのような批判をこの場で了承することはできない、ということ、また、その箇所がどう読めるか、ということ、そのような写像から自明のこととして判

断できるようなものではないということを述べ、大村氏のこの発言はヴァーシナと筆者に向けられた一種の Provokation である³⁾、と締め括っておいた。時間の制約もあって、筆者はここでは、大村氏とそれ以上の立ち入った議論ができないまま、この会議を離れて帰京した。

その後、大村氏から仙台グループのメーリング・リストを通じて、氏の手によるこの会議の議事録が配信されるとともに、ヴァーシナに宛てた、当該箇所を nur とすることの誤解読を説明するメールが配信された。ヴァーシナは、それにたいして、自分は nur と読むべきだと考えたとする主張を述べたメールを送り、これもまた大村氏によってメーリング・リストにポストされた。

以上の経過は国際マルクス＝エンゲルス財団および日本 MEGA 編集委員会の内部での議論であり、筆者はそのようなものとして行われているものと諒解していたので、それに急いで対応する必要はなく、じっくり調べ直したうえで、事実にもとづいて内部での議論を展開すればよいと考えて、それらのメールにもいっさい反応しないでした。

ところが、これに追い打ちをかけるかのような出来事が起こった。2003年10月17日に開催された、マルクス・エンゲルス研究者の会の例会で、問題の一語をどう読むか、という問題が取り上げられ、10月19日には、この会議の内容を伝える大村氏のメールが仙台グループのメーリング・リスト——仙台グループのメンバー以外の参加者をも含むメーリング・リスト——にポストされた。それによれば、大村氏と大野節夫氏とを報告者として行なわれた例会は次のようなものであった。

まず、大村氏が「70年代の議論から最近の MEGA 編集者間の議論まで、この間の経緯を、特にびわこの編集者会議〔前に触れた京都での日本

3) ヴァーシナと筆者とのテキストを引き渡した直後に、そのなかの一語について解説が誤りだと言いつるのは、いま受け取ったテキストでの解説は信用できないものだ、と説明するのと同然であって、ヴァーシナと筆者の困惑と怒りを引き出そうとする試みとして、まさに Provokation と呼ぶに値するものであった。

MEGA 編集委員会仙台グループの会議]以降)の「編集者内部の議論を立ち入って紹介した」(強調は引用者)。

そして、仙台グループの大野氏から「画像の紹介があり、nur と nie との差異、特に r と e との表記(書き方)の違いについて詳細な説明があり」、大村氏によれば、「これには出席者全員納得されていた」そうで、「当該箇所は〈どちらとでも読める〉という発言は皆無だった」とのことである。

大村氏によれば、これによって(当該の一語が nur ではなく nie であることが確定したので)「解説そのものはもはや争点ではなくなった」のだそうで、問題は「nur と読んで文脈を理解できるかどうか」に移り、この問題をめぐっての意見交換が行なわれたとのこと、そしてそのさい、「議論では、大谷さんの訳文と当該箇所の解釈について、大野さん、また私から論評があった」そうである。

このようにして「解説そのものが争点ではなくなると」、大村氏によれば、「nur と読んで意味が通るかどうかという議論は無意味になるので」、「今後の議論の争点は、未公表の〔第〕二稿の中に、この注記を反映した記述があるのかどうかを確認すること、確認できればその性格を明確にする必要があり、確認できないのなら、何故マルクスは当初の計画を放棄したのか、に移行する」であろうとのことであった。

例会について以上のように紹介されたあと、大村氏は、「今回の議論」の「契機となった」のは、筆者が「新著〔『マルクスに拠ってマルクスを編む』〕で公然と当該箇所はエンゲルスの誤読だと断言」したことだと言われ、「この発言は、エンゲルス編集を取り上げる新 MEGAI/12 の編集者として看過することはできなかった」と述べられ、筆者の「議論にあたって見たが」、筆者の「論拠は、結局、コブガンキンがそのように読んだ、ということだけのように見え」、「事実」、筆者の「一連の論考には(こうした断言をするなら当然なすべきと思われる)草稿の他の箇所の筆跡との比較を試みた痕跡が皆無」だ、とされる。そこで大村氏たちは、「この欠

を補い、自身の担当巻編集の責任を全うしようと考えた」のだそうで、2003年の「3月から、東北大には新 MEGA 第 II 部『資本論』及び準備労作」に関する全ての（収録予定のものも含む）草稿・自用本のマイクロが入ったので、この作業をマイクロで試みた」とのこと。その結果、上に述べたように、当該の一語は nur と読むことはできず、nie と読むほかはない、ということが確定し、「解説そのものは争点ではなくなった」のだそうである。

大村氏の以上の発言について、ここでその細部をいちいち取り上げて議論することはやめておこう。本稿の全体が、ここで大村氏が開陳されていることへの筆者の回答となるはずであるが、ただ一つだけ、言っておく。筆者が拙著『マルクスに拠ってマルクスを編む』の「あとがき」で、nie はエンゲルスの誤読だとする判断を前提にして、注32をどう読むかという問題に論及したのは、すでに筆者が長年にわたってこの問題に関わってきた、その延長線上でのものであって、ここではじめて発言したことでもなければ、MEGA 第 2 部第11巻の編集者として行なったことでもまったくなく、いわんや日本 MEGA 編集委員会内部での議論を外にもちだすようなものではまったくなかった。「あとがき」を読まれればすぐも分かるように、そこでは MEGA の編集作業についても MEGA 第 2 部第11巻に収録されるべきテキストについてもまったく触れてはいない。大村氏が、「この発言は、エンゲルス編集を取り上げる新 MEGA II/12 の編集者として看過することはできなかった」と言われているのは筆者の理解を絶するものである。

なお、研究者の会のこの例会は、経済理論学会大会の前日に行なわれた。経済理論学会では大会の前日に幹事会を開催するので、経済理論学会の幹事は当然にこの例会には参加することができない。筆者はすでに繰り返して——今年度だけでなくすでに前年度も——世話人の橋本直樹氏に手紙ないしメールを書き、幹事である会員は出席できないような日程の設定はしないでほしい、と伝えていた。今回も、代表幹事である筆者は幹事会

に出なければならぬので今回の例会にも出席できない、と橋本氏に連絡してあったのであり、そうした事情で出席できないことが明らかで、そのように通知をしていた筆者の不在の場で、つまり筆者が反論しようもないところで、筆者への激しい一方的な批判が行われたことを知って驚くほかはなかった。しかも、国際マルクス=エンゲルス財団および日本 MEGA 編集委員会の外部のものであるこの例会の場に「編集者内部の議論」なるものがそっくりもちだされたことも、筆者にはまったく理解できないところであった。

大村氏のメールによれば、研究者の会は、編集中の『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第41号で、「今次例会の模様を紹介」する準備を進めているとのことである。これまでは、問題がもちだされた外部はとりあえず、メーリング・リストのメンバーと例会の参加者の範囲にとどまるものと言えなくもなかったが、学術雑誌としての同誌に例会の内容が掲載されることになれば、ことはさらに大きな広がりをもつことになる。不在の筆者に対する一方的な批判を含む一連の議論が、社会的に公開されることになるのだからである。しかも、怪訝なことに、これまで同誌では、「公平の原則」なるものを口にしつつ、議論の対象とされる論者にその同じ号での反論掲載の可能性を——その可能性は必ずしも利用されたわけではなかったにせよ——提供してきた前例があるにもかかわらず、「今次例会」で一方的に攻撃を受けた、同会会員でもある筆者にたいして、同号の編集者からは、同号に収録する内容についての通知も反論の意思についての問い合わせも、総じてなんのコンタクトもないのである。大村氏のメールによれば、同号には画像を収めたCDを添付して「問題の所在を会員全員に分かるようにする」準備を進めるのだそうである。同号の編集者は、筆者に一言の反論の機会を提供することもないままこのような鳴り物入りで筆者に対する一方的な批判を展開することを、自分はよいことをしているのだと思い込んでいるのであろう。

いずれにしても、このような状況の展開は、国際マルクス=エンゲルス

財団および日本 MEGA 編集委員会の内部で時間をかけて議論をすればいい、と悠長に構えていた小生の姿勢の根本的な変更を迫らないではいかなかった。つまり、事態の経過が、問題の一語を nur とする解釈を筆者が正しいものとして扱ってきた根拠を、財団および日本 MEGA 編集委員会の内部でではなく公開の場ではっきりと、しかも速やかに示すことを筆者に強制したのである。

そこで筆者は、これまで筆者が当該の語を nie ではなく nur と読むべきだとしてきた根拠を、マルクスの草稿になじみのない一般の読者にも確実に伝えることができるような仕方でも記述できるように、当該箇所の筆跡の解析をあらためて行なうとともに、調査の仕方に工夫を行ない、問題の徹底的な洗い直しを行なった。

以下の二つの節の課題は、当該の語がマルクスによって nur と書かれたのだということ、今回の作業によって得られた調査結果を使うことによって読者に納得していただけるようにできるだけ丁寧に記述することである。

本稿では課題を、草稿の筆跡の分析によれば当該の一語は nur としか読めないということ、また、この語に続く so weit..., als (ないし wie) という表現をマルクスの使用例で見れば、nur so weit... と読むのがきわめて自然であること、この二点を述べることに限定する。したがって、nur とした場合、その前後の文脈と整合的に読むことができるか、という問題——富塚氏が、そうはできない、と主張されている論点——については、本稿では立ち入らないことにする。

2. マルクスの筆跡

まず、マルクス草稿の当該の一語は、その前後から切り離して独立に見ても、nie ではなく nur と書かれていることが明らかだ、ということを書こう。

マルクスが残した膨大な自筆の書き物のなかに、膨大な数の nie と nur という語が書かれていることは容易に想像できるであろう。それらのすべてを比較検討することはほとんど無理であるだけでなく、また意味のあることでもない。ここでは、当該の一語が書かれている箇所を含む草稿の一定の範囲を区切り、そのなかから nie と nur という語をすべて拾い出し、この両者に一義的に区別をすることができるような特徴があるかどうかを調べる。

その範囲としては、『資本論』第2部第2稿から MEGA 第2部第11巻のためにヴァーシナが作成したテキストのうち、第2部第2章の草稿102-129ページの28ページを取る。これは、三つのファイルに分けて保存されたヴァーシナの第2章テキストの第3の部分に当たる（以下、これを「対象範囲」と呼ぼう）。このなかには、nie が15回、nur が162回、nun が25回書かれている。のちに確認されるであろうように、それぞれこれだけの個数の筆跡があれば、それぞれの識別的特徴をつかむことは十分に可能である。逆に言えば、これだけの量を集めることをせず、——大村氏が京都会議のデモンストレーションでやったように——当該の一語のある前後の数ページにでてくるものだけを比べてみる程度のことで済みますのであれば、そのような識別的特徴を見逃す可能性がきわめて高い。当該の一語があるのは草稿の118ページであるが、117-119ページだけについて言えば、当該の一語を除いて nur は17回あるものの、nie は3回、nun は2回しか書かれていない。

第2部第2稿についても、すでに述べたように、仙台グループはすでに第2稿の鮮明な電子データを入手しており、京都会議でのデモンストレーションはそれによって行われたのであるが、筆者は目下のところそれを利用できないので、ここでは、大原社会問題研究所が所蔵する第2稿のフォトコピーを使用する。言うまでもなく、これは、大村氏のもとにあるきわめて鮮明な電子データに比べればはるかに不鮮明で、筆跡の輪郭も拡大すれば次第にぼやけてしまうものである。しかし、実際に作業をしてみても

かったのは、むしろこのようなある程度の不鮮明さは、筆跡の特徴をとらえるにはむしろ向いていると言えるかもしれない、ということであった。拡大していくと、インクのかすれやペンの運びの細部はすっかり消えてしまうが、それでもなお残る筆跡の特徴は、それぞれの語を十分に区別させるものである。とりわけ、後述するように、nie と nun との区別はときとして困難であるが、nur と他の二語との識別的区別は明瞭に浮かび上がるのである。

ここでの作業の具体的な内容は、対象範囲の各ページをスキャナーで読み込んで作成した JPEG ファイルから、ヴァーシナ作成のテキストのなかで nie, nur, nun と解読されているすべての語を切り取り、それらを比較・対照するということである。

実際にスキャナーで読み込んで作成した JPEG ファイルを見ると、ページによってフォトコピーの状態が異なっているだけでなく、同じページのなかでも草稿の用紙の劣化の状態が均一ではないために、写像とその背景との濃度がまちまちで、きわめて見にくいものもかなりある。そこで、それぞれの語の形態の特徴が際だって見えるように、細部の忠実度は犠牲にしてすべての画像の階調を二階調に限定した。つまり、画像を構成しているドットを白か黒かの二値のどちらかになるようにしたのである。これによって細部がつぶれた結果、多くの画像がインクのかたまりのように見えるだけとなった。しかし、すぐこのあとで見られるように、むしろこの作業によって nie と nun と nur という 3 語のそれぞれの筆跡の特徴が、とりわけ nie および nun と nur との筆跡の違いが鮮やかに浮かび上がることになった。

作業にはいるまえに、この三つの語がドイツ文字 (Fraktur) の筆記体ではどのように書かれるかということを見ておこう。マルクスの書体は、晩年になると、次第にラテン文字の影響を受けて、たとえば第 2 部の第 8 稿ではほぼラテン文字といってもいい書体で執筆するようになったが、いま見ようとしている第 2 稿は引用部分を除けば基本的にドイツ文字の筆記



Fig. nie nur nun

体が使われている。マルクスの書体は、縦の線がほぼ垂直になっているので、縦線を垂直にしてnieとnurとnunとを書いてみよう。ここでは、左から右にこの三語を並べている。見られるとおりに、この三つの文字はきわめてよく似ている。iの上の点とuの上の反った弓とは、実際にはほとんど区別のつかない点で書かれるので、この点と弓とを区別しないとすれば、この三つはさらに類似しているといえることができる。

さて、まず当該の一語の写像を掲げよう (Fig. X.)。この語が、エンゲルス版ではnieと読まれ、ML研の解説文およびヴァーシナのテキストではnurと読まれているわけである。そこで、この語がnieかnurか、あるいはひょっとしてnunか、ということ判断するために、対象範囲から、すべてのnieとnurとnunを拾ってみる。



Fig. X.

まず、nieである。



Fig. nie_01.



Fig. nie_02.



Fig. nie_03.



Fig. nie_04.



Fig. nie_05.



Fig. nie_06.



Fig. nie_07.



Fig. nie_08.



Fig. nie_09.



Fig. nie_10.



Fig. nie_11.



Fig. nie_12.



Fig. nie_13.



Fig. nie_14.



Fig. nie_15.

見られるように、基本的には、まず n と i の縦の線とを続けて書き、それに i の上の点を書いたあと、e を書き加えるという仕方で書かれているが、i の上の点と e とが続けて書かれているものもあり、また、i の点だけを全体に加えたように見えるものもある。ただ、注目すべき特徴は、末尾の e の部分がほとんどすべてについて、ほぼ水平の横向きに進んだあと、やや下に向かう線で終わっている、ということである。この部分は、e のドイツ書体の右側の線の部分にあたるのであって、心持ち山型をついていることが分かるであろう。

次に nun を見よう。Fig. nun_13 では、最初の n が大文字になっている。



Fig. nun_01.



Fig. nun_02.



Fig. nun_03.



Fig. nun_04.



Fig. nun_05.



Fig. nun_06.



Fig. nun_07.



Fig. nun_08.



Fig. nun_09.



Fig. nun_10.



Fig. nun_11.

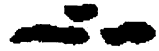


Fig. nun_12.



Fig. nun_13.



Fig. nun_14.



Fig. nun_15.



Fig. nun_16.



Fig. nun_17.



Fig. nun_18.



Fig. nun_19.



Fig. nun_20.



Fig. nun_21.



Fig. nun_22.



Fig. nun_23.



Fig. nun_24.



Fig. nun_25.

見られるように、nun は nie とほとんど区別がつけられないほどに酷似している。たとえば、Fig. nie_05 および 13 と Fig. nun_11 および Fig. nun_22 とを、また、Fig. nie_12 と Fig. nun_17 とを、また、Fig. nie_11 と Fig. nun_25 とを比べられたい。これらの語だけをいくら熟視しても、おそらくは nie であるのか nun であるのか、判定できないであろう。この二語については、多くの場合、文脈のなかで判読するほかはないように思われる。nun の場合にも注目しておきたいのは、nie の場合には末尾の e の右の線に当たる部分が、ここでは n の右の線となっていて、これもほ

とんどすべてについて、ほぼ水平の横向きに進んだあと、やや下に向かう線で終わっている、ということである。ここでも心持ち山型をつくっていて、末尾はけっして上方に跳ねあがっていない。

そこで次に、nur である。対象範囲には162個の nur がある。その全部の写像を通して観察し、上に見た nie および nun の二語の特徴と対比されるならば、それらとははっきりと異なる識別的特徴が見て取られるはずである。nie の末尾の e および nun の末尾の n では、それらの最後の部分は、ほぼ水平の横向きに進んだあと、やや下に向かう線で終わり、したがって心持ち山型をつくっていた。つまり、上に向かって跳ねあがることで終わるといことはまったくなかった。それにたいして、nur の場合には、162個の写像のすべてで、語末の r の最後の筆が上に向かって跳ね上げられて終わっているのである。このように、nur は nie および nun とははっきりと異なる特徴をもっているので、nur は、それが nie でも nun でもなくて nur だと判断するのに、その前後の文脈を理解する必要はないのであって、それぞれの語の書体そのものを独立に観察しただけでも、それらのもつ識別的特徴によって nie および nun とははっきりと区別できるのである。

しかし、nur のすべてについてこうした共通の識別的特徴が見られるとはいえず、nur の場合には、nie および nun の場合とは異なり、その他の点でそれぞれの写像がかなりの個性をもっており、かなりのばらつきがあるように見える。そこで、162個の nur のすべての写像に、それらが対象領域のなかに現われる順序に従って Fig. nur_001 から Fig. nur_162 までの通し番号をつけたうえで、それらのなかで類似の書体をもつもの同士を集めてみると、ほぼ、五つのグループに分かれた。以下、それぞれのグループごとに写像を掲げ、それぞれのグループの特徴を分析してみよう。

① 第1グループ

کاتر کاتر کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_026. Fig. nur_028. Fig. nur_032. Fig. nur_034. Fig. nur_036.

کاتر کاتر کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_039. Fig. nur_044. Fig. nur_048. Fig. nur_049. Fig. nur_053.

کاتر کاتر کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_055. Fig. nur_057. Fig. nur_062. Fig. nur_068. Fig. nur_070.

کاتر کاتر کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_077. Fig. nur_098. Fig. nur_100. Fig. nur_101. Fig. nur_102.

کاتر کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_106. Fig. nur_108. Fig. nur_111. Fig. nur_120.

کاتر کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_122. Fig. nur_124. Fig. nur_132. Fig. nur_133.

کاتر کاتر کاتر

Fig. nur_139. Fig. nur_153. Fig. nur_156.

このグループは、さきに見た、nur のドイツ文字筆記体の特徴を最もよく残している。まず、nu まで書き、そこでいったんペンを離して u の上の反った弓を書き、最後に、u からちょっと間を置いて r を書いている。この r はドイツ文字の r の特徴をよく残している。最後の部分でペンは上に向かって曲線を描き、一部はその最先端がきちんと右下に向けられている。

② 第2グループ

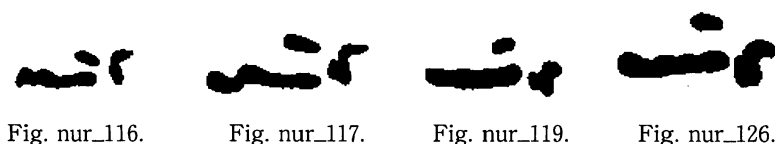
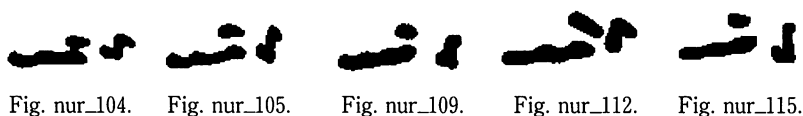
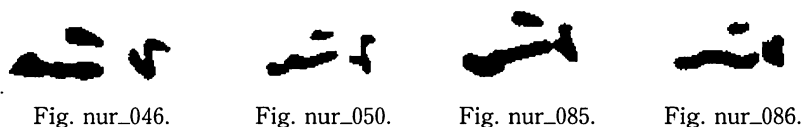
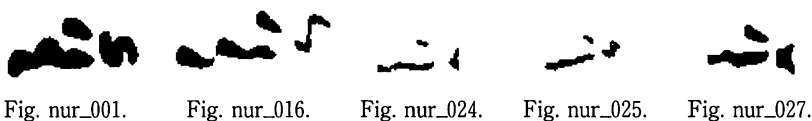




Fig. nur_127.



Fig. nur_131.



Fig. nur_135.



Fig. nur_140.



Fig. nur_151.



Fig. nur_152.

このグループでは、最後の r の書き方が簡略化されて、英語の r に近くなり、ほとんど縦の線に近づいているものもある。しかし、これらのすべてで、語の最後の部分は、下から上に跳ねあがる曲線ないし山形のカギとなる曲線で終わっていることが分かるであろう。

③ 第3グループ



Fig. nur_003.



Fig. nur_012.



Fig. nur_015.



Fig. nur_017.



Fig. nur_020.



Fig. nur_021.



Fig. nur_023.



Fig. nur_029.



Fig. nur_031.



Fig. nur_037.



Fig. nur_041.



Fig. nur_042.



Fig. nur_043.



Fig. nur_045.



Fig. nur_047.



Fig. nur_051.



Fig. nur_052.



Fig. nur_056.



Fig. nur_059.



Fig. nur_060.



Fig. nur_064.



Fig. nur_065.



Fig. nur_066.



Fig. nur_074.



Fig. nur_076.



Fig. nur_083.



Fig. nur_088.



Fig. nur_096.



Fig. nur_110.



Fig. nur_125.



Fig. nur_142.



Fig. nur_143.



Fig. nur_149.



Fig. nur_155.



Fig. nur_158.



Fig. nur_159.



Fig. nur_161.

ここでは、書き方がさらに乱暴になって、uのうへの反った弓からrの下部まで連続して書かれている。そして、語の末尾は、この下部から上に跳ねあがる曲線を描き、一部は右に向かうカギ型で終わっている。

④ 第4グループ



Fig. nur_002.



Fig. nur_004.



Fig. nur_005.



Fig. nur_006.



Fig. nur_007.



Fig. nur_010.



Fig. nur_011.



Fig. nur_013.



Fig. nur_014.



Fig. nur_018.



Fig. nur_022.



Fig. nur_030.



Fig. nur_033.



Fig. nur_038.



Fig. nur_040.



Fig. nur_058.



Fig. nur_061.



Fig. nur_063.



Fig. nur_067.



Fig. nur_069.



Fig. nur_070.



Fig. nur_073.



Fig. nur_075.



Fig. nur_078.



Fig. nur_079.



Fig. nur_080.



Fig. nur_081.



Fig. nur_082.



Fig. nur_084.



Fig. nur_087.



Fig. nur_091.



Fig. nur_092.



Fig. nur_093.



Fig. nur_095.



Fig. nur_097.



Fig. nur_107.



Fig. nur_114.



Fig. nur_118.



Fig. nur_137.



Fig. nur_138.



Fig. nur_141.



Fig. nur_144.



Fig. nur_145.



Fig. nur_146.



Fig. nur_147.



Fig. nur_148.



Fig. nur_150.



Fig. nur_157.



Fig. nur_160.



Fig. nur_162.

ここでは、u の下の部分から上の弓に移るときに、ペンを離さずに続けて書いている。そのために、nur の全体が一筆書きとなっている。それが進んで、たとえば、Fig. nur_014, Fig. nur_061, Fig. nur_079, Fig. nur_087, Fig. nur_162 などでは、第 1 グループと共通の語であるとは思えないほどの簡略化が行なわれている。しかしここでもそのすべてで、語末が下から上に跳ねあがる曲線で終わっていることが認められる。

⑤ 第 5 グループ



Fig. nur_008.



Fig. nur_009.



Fig. nur_019.



Fig. nur_035.



Fig. nur_054.



Fig. nur_072.



Fig. nur_121.



Fig. nur_123.



Fig. nur_128.



Fig. nur_129.



Fig. nur_130.



Fig. nur_134.



Fig. nur_136.



Fig. nur_154.

最後のこのグループに共通の特徴は、u と r とが離れておらず、続けて書かれたのではないと思われるようになっていっているところである。なかには、u の上の反った弓を書いたのちに r を書いたのだが、u と r との間を空けなかったためにこのように見えるものもあるが、また他方、u の上の弓は r まで書き終えたあとに加えたように思われるものもある。しかし、ここでも、語末が上に向かっていく曲線で終わっていることは、他のグループとまったく共通である。

さて、nur のすべての写像を以上のように5つのグループに分け、それぞれの特徴をつかんでみると、一見きわめて多彩に見える nur の書体のあいだに繋がりがあることが明らかとなる。また、あらためて、すべてのグループのすべての写像について、語末が上に向かって登っていく曲線で終わっていることを確認できた。

以上のところから、nur の字体が nie および nun とは明らかに異なる識別的特徴をもっていることが明らかとなった。最も重要な点は、nie および nun の場合には、語末が横に流れるか、ないしはいくらか下向きになる線で終わっているのにたいして、nur の場合は、一貫して、語末が、下から上に向かって書かれた——そしてしばしばカギ型または山型の末尾となる——曲線で終わっている、ということである。

それでは、さきに Fig. X としておいた問題の一語は nie であろうか、

nun であろうか、nur であろうか。答えはもう言わずして明らかであろう。Fig. X を仔細に見られれば見間違いのないように、この語の語末は、けっして上から下に向かって書かれたものではなく、下から上に向かって描かれた曲線である。この曲線を、nie や nun の語末に見られるような、横にただらと流れるか、あるいは下向きに終わる線と見ることはまったく不可能である。

じつは筆者は、意図的に、Fig. X として掲げた当該の一語を、162個の nur のなかに含めておいた。それは、5つのグループのどこかに再録されているわけである。もし読者に余裕があれば、Fig. X をじっくり観察して、この nur が5つのグループのうちのどれに属するかを考えていただき、さらに、そのグループのなかからそれを特定することを試みていただきたいと思う。もし、この162個のなかから、nie ないし nun と共通の特徴を手がかりにして、この語だけを異質のものとして簡単に探し出すことができるとすれば、それが nur であることは疑わしい、nur ではないのではないか、ということになるであろう。しかし、読者が探り当てられた Fig. X の語が、その属するグループの他の nur と、さらには161個の他の nur と、共通の特徴をもつことを認められるのであれば、これは nur と読むほかはないのである。

どのグループに属するか、ということについては答を言おう。Fig. X が、5つのグループのうちで第2グループに属するものであることは容易に見て取られるはずである。このグループに属する28個の nur のうちのどれが Fig. X であるかは、読者の同定にまかせたい。Fig. X で語末の r の末尾が英語の筆記体の r の末尾のようになっていることも、またさらに、最後が山型ないしカギ型になるべき部分もほとんど省かれてしまって、ただ上に向かっていく曲線だけが残っていることも、Fig. nur_085, Fig. nur_116, Fig. nur_126, Fig. nur_127, Fig. nur_131 など、第2グループのうちの多くのものに共通することなのである。

筆者は、以上の筆跡解析によって、当該の一語は nur と書かれていた

ことを確定できたと確信している。これによって同時に、第2稿の解説文を作成したモスクワの旧ML研究所の所員が、エンゲルス版を参照していたことが確実であるにもかかわらず、エンゲルス版に引きずられることなく正しく nur と解説していたということ、また、この第2稿を収めるMEGA第2部第11巻のテキスト作成にあたって、編集担当者のヴァーナが、この解説を引き継いで nur としているのが正しいことが示されたはずである。

3. マルクスの使用例

さて、当該の一語が nur であると確定できたとしても、これで問題は片づかないであろう。というのは、次のような主張をする人がでてくることが予想されるからである。すなわち、当該の一語が nur であることを認めるとしても、前後の文脈からすれば、この nur はマルクスの誤記であって、マルクスは nie と書くべきところを nur と書いてしまったと考えるべきだ、だから、エンゲルスがこれを nie としたのは、解説を誤ったのではなくて、意識的にマルクスの誤記を訂正する適切な編集作業だったのだ、という主張である。

前後の文脈からすれば、という場合、これが nur であれば論理的に筋が通らなくなる、マルクスが支離滅裂なことを言っていることになる、という意味で言われることもあるであろう。実際、富塚氏は、nur だとすれば、マルクスの文章は論理的に「前後撞着」に陥ることになると主張されている（前出「再生産論の課題〔III〕」, 31-32ページ, 38ページ）。はたしてそうか、ということについての立ち入った検討は、本稿ではまだ控えておこう。

ここでは、あらためて、当該の一語を含む文章は、この語が nie である場合と nur である場合とでは、ドイツ語の文章としてどのように意味が異なるか、ということを見たうえで、さらに、参考までに、マルクスがこ

の語を含む文と同じ構造でこの両語を使った用例を挙げておこう。

まず、第2部第2稿118ページにある当該の一語を含む文章の全体を掲げよう。

„Fernerer Widerspruch: Die Epochen, worin d. Kapit. Produktion alle ihre Potenzen anstrengt, up to the mark producirt, turn out as periods of overproduction; weil d. Produktionspotenzen **nur** so weit anzuwenden, als dadurch nicht nur *Mehrwerth* producirt, sondern *realisirt* werden kann; d. Realisation (Verkauf d. Waaren) d. Waarenkapitals, also auch d. Mehrwerths aber *begrenzt, beschränkt* ist nicht durch d. *consumtiven* Bedürfnisse d. Gesellschaft, sondern durch d. *consumtiven* Bedürfnisse einer Gesellschaft, wovon d. grosse Mehrzahl stets *arm* ist u. *arm* bleiben muß etc.“

ここで筆者が太字にした *nur* が問題の一語である。これが *nur* である場合と *nie* である場合とでは、ドイツ語の文としてどのように違うことになるか、ということを見るためには、この一語を含む、セミコロンの次の *weil* のあとから次のセミコロンの前までの文、すなわち *d. Produktionspotenzen nur so weit anzuwenden, als dadurch nicht nur Mehrwerth producirt, sondern realisirt werden kann* という文を取り上げればよい。

この文では、*anzuwenden* という *zu* を伴う不定句のあとに *sein* (*sind*) が省略されていること、この *zu* を伴う不定句が、「されなければならない」という意味ではなくて、「されることができると」という意味で使われていること、*dadurch* (それによって) の「それ」が直前の *Produktionspotenzen* (生産諸力能) を指すこと、また「それによって」というこの句は——〈生産諸力能によって剰余価値が実現されうる〉——ということは意味をなさないのだから——*produzieirt* [*werden kann*] (剰余価値が生産 [されうる]) という部分だけを修飾しているのであって、*realisirt*

werden kann ([剰余価値が] 実現されうる) という部分にはかかわりが
ないこと、これらの点について異論を唱える人はいないであろう。

問題の一語が *nie* である場合、この文章は、次の二つの読み方が可能で
であろう。第1に、*nie* は、これを入れない文、すなわち *d. Produktions-*
potenzen so weit anzuwenden, als dadurch nicht nur Mehrwerth
producirt, sondern realisirt werden kann の全文を否定している、という
読み方である。すなわちこの場合には、「生産諸力能が充用されうるのは、
剰余価値が、それらの力能によって生産されうるだけでなく、実現もされ
うる、というかぎりにおいてである」ということの全体が否定されて、
「生産諸力能が充用されうるのは、剰余価値が、それらの力能によって生
産されうるだけでなく、実現もされうる、というかぎりにおいてである、
ということとはけっしてない」、と読むことになる。第2には、*nie* は次の
so weit のみを否定しているのだと読む読み方で、この場合には、「生産
諸力能が充用されうるのは、剰余価値が、それらの力能によって生産され
うるだけでなく、実現もされうる、というかぎりにおいてではけっしてな
い」という意味になる。この二つのどちらをとるにしても、文章の内容を
経済学的に理解しようとすれば、「生産諸力能が充用されうる」のは「剰
余価値が、それらの力能によって生産されうるだけでなく、実現もされう
る」という限界内ではけっしてない、という意味に取るほかはないのであ
って、エンゲルス版の翻訳はこれまでいずれもこのような理解のうえで
行なわれてきたのであった。

しかし、このように *so weit ... , als ...* という、副文である *als* 以下の内
容によって主文の内容を規定しているという構文の場合に、全文否定であ
れ部分否定であれ、これを *nicht* ないしそれに類する否定詞で否定すると
いう言い回しが自然なもの、ごく普通のものと言えるか、ということが問
題になる。問題の文はマルクスが書いた文であるから、マルクスの場合に
は、このような否定文を書くことがあったのだろうか、と問うのが自然で
ある。

これにたいして、問題の一語が nur である場合には、読み方は一つしかない。nur (でしかない) は、so weit ..., als ... (……であるかぎり) の so weit を強め、これだけに制限しているのであって、「生産諸力能が充用されうるのは、剰余価値が、それらの力能によって生産されうるだけでなく、実現もされうる、というかぎりにおいてでしかない」という意味になる。このような言い回しがごく普通に使われるであろうことは常識的にもすぐに想像できるが、この場合にも、マルクスではどうだったのか、ということが気にかかる。

そこで、以上のことを確認したうえで、マルクスの著作のなかに、nie so weit ..., als のような構文をもつ文章と、nur so weit ..., als のような構文をもつ文章とを探してみよう。

ここでは、なるべく網羅的に用例を見つけるために、MEW (ディーツ版『マルクス・エンゲルス著作集』) から主要著作を選んで収めた CD 版の Digitale Bibliothek, Bd. 11, Marx-Engels Ausgewählte Werke, Berlin 1998 を利用し、さらに、筆者の手もとにある第 2 部諸草稿での用例を加えよう。

nie so weit ..., als については、so weit ..., als のほかに、so weit が so fern となっているもの、als が wie となっているものを加え、これらがなんらかの否定詞によって、すなわち nie や nicht や auf keinen Fall などによって否定されている文を探索する。nur so weit ..., als についても、so weit が so fern となっているもの、als が wie となっているものを加え、これらの前に nur があるものを探索する。これらを、CD 版付属のソフトないしワープロソフトの検索機能を利用して検索した。

その結果、マルクスの著作からは、nicht so weit ..., als ないしそれにたぐいする文章はただの一つも見つからなかった。ただし、マルクスの書き物をすべて調べ尽くしたわけではないから、マルクスがこの言い回しをまったく使わなかった、と断言できるわけではないので、今回の探索ではマルクスが使っているケースは見つけることができなかった、と限定的に言

っておく。

これにたいして、*nur so weit ... , als* ないしそれにたぐいする文章は、マルクスの書き物のなかに15箇所見つかった。以下、列挙する。

- (1) „Die Theorie wird in einem Volke immer **nur so weit** verwirklicht, **als** sie die Verwirklichung seiner Bedürfnisse ist.“ (Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung. MEW Bd.1, S. 386.) 「理論はつねに、それがあつた国民の諸欲求の実現である場合にだけ、その国民のうちに実現される。」
- (2) „Ihm gilt nur *ein* Verhältnis um seiner selbst willen, das Exploitationsverhältnis; alle andern Verhältnisse gelten ihm **nur so weit, als** er sie unter dies eine Verhältnis subsumieren kann, und selbst wo ihm Verhältnisse vorkommen, die sich dem Exploitationsverhältnis nicht direkt unterordnen lassen, subordiniert er sie ihm wenigstens in der Illusion.“ (Die deutsche Ideologie. MEW Bd.3, S. 395.) 「彼〔ブルジョア〕にとっては、ただ一つの関係、すなわち利用〔搾取〕関係だけがそれ自身のゆゑに重要性をもつ。彼にとっては、他のすべての関係は、それらを彼がこの一つの関係のもとに包摂することができるかぎりにおいてのみ重要なのであつて、たとへ利用関係に直接従属させられないような諸関係が彼の前に現われる場合でさえも、彼はこれらを少なくとも幻想のなかで利用関係に従属させる。」
- (3) „Wir wollen nur den elenden Charakter dieser Aneignung aufheben, worin der Arbeiter nur lebt, um das Kapital zu vermehren, **nur so weit** lebt, **wie** es das Interesse der herrschenden Klasse erheischt.“ (Manifest der kommunistischen Partei. MEW Bd. 4, S. 476.) 「われわれはただ、労働者が資本を増殖するためだけに生き、支配階級の利益が必要とするあいだだけ生きるという、この取得の悲惨な性格を廃止しよ

うとしているにすぎない。」

- (4) „Erst am 18. Oktober 1852, mitten in öffentlicher Sitzung, wird es produziert, **nur so weit** produziert, **als** dem Stieber gut dünkt.“ (Enthülungen über den Kommunisten-Prozeß zu Köln. MEW Bd.8, S. 436.) 「公判が進行していた1852年10月18日にはじめて、この保管文書は提出された。しかもシュテューバーが自分に好都合だと思う範囲内で提出された。」
- (5) „Die Werthbestimmung als solche interessirt und bestimmt den einzelnen Capitalisten und das Capital in jeder besondern Productionsphäre, **nur so weit, als** das verminderte oder vermehrte Arbeitsquantum — das mit dem Steigen oder Fallen der Productivkraft der Arbeit — zur Production der Waaren erheischt ist, in dem einen Fall ihn befähigt, bei den vorhandenen Marktpreisen seine Konkurrenten zu unterkaufen, und dabei Extraprofit zu machen, oder ihn zwingt, den Preiß der Waaren zu erhöh'n, weil ein Stück mehr Arbeitslohn, mehr constantes Capital, daher auch mehr Zins, auf das Theilproduct oder die einzelne Waare fällt.“ (Kapital, III. Ms.I. MEGA, II/4.2, S. 891.) 「価値規定そのものがそれぞれの特殊的生产部面の個々の資本家や資本の関心を引きそれらを規定するのは、ただ、——労働の生産力の上がり下がりにつれての——商品の生産に必要な労働量の増減が、一方の場合には既存の市場価格のもとで資本家が競争相手よりも安く買ってそのさいに特別利潤をあげることを可能にするか、そうでなければ、いくらかより多くの労賃やより多くの不変資本やしたがってまたより多くの利子が部分生産物または個々の商品に割り当たるので資本家に商品の価格の引き上げを強制するかぎりでのことである。」
- (6) „Der Kapitalist paßt auf, daß die Arbeit ordentlich verrichtet wird und die Produktionsmittel zweckmäßig verwandt werden, also kein Rohmaterial vergeudet und das Arbeitsinstrument geschont, d.h. **nur**

so weit zerstört wird, **als** unzertrennlich ist von seinem Gebrauch in der Arbeit.“ (Kapital, I. MEGA, II/5, S.136.) 「資本家は、労働が整然と行なわれて生産手段が目的的に使用されるように、つまり原料がむだにされず労働用具がたいせつにされるように、言い換えれば作業中の使用によってやむをえないかぎりでしか損傷されないように、見守っている。」

- (7) „Der Verfasser, ein ungemein selbstgefälliger ‚wiseacre‘, hat mit seiner Konfusion und daher mit seiner Polemik **nur so weit** Recht, **als** weder Ricardo noch irgend ein anderer Oekonom, vor oder nach ihm, die *beiden Seiten der Arbeit* genau geschieden, daher noch weniger ihre verschiedene Wirkung auf die Werthbildung analysiert hat.“ (Kapital, I. MEGA, II/5, S.153.) 「並はずれてうぬぼれの強い「知ったかぶり屋」のこの著者が、その混乱の、したがってまたその論難の権利をもつのは、ただ、リカードもその前後のどの経済学者も労働の二つの面を正確に区別しておらず、したがってこの二つの面が価値形成に及ぼす作用の相違などはなおさら分析していないというかぎりでのことである。」
- (8) „Indeß besteht d. Theil d. Mehrwerths, der nicht in andren Waaren existirt, sondern neben diesen andren Waaren in Geld, **nur so weit** aus einem Theil des *jährlich producirt*en Mehrwerths, **als** ein Theil d. *jährlichen Goldproduction* zur Realisirung d. Mehrwerths cirkulirt.“ (Kapital, II. Ms.II. S.125.) 「しかし、剰余価値のうちの、他の諸商品のなかに存在するのではなくこれらの他の商品と並んで貨幣として存在する部分が、その一年間に生産された剰余価値の一部分から成っているのは、ただ、年間金生産の一部分が剰余価値の実現のために流通するかぎりでのことである。」
- (9) „Das für Arbeitslohn u. Mehrwerth vorgeschobne Geld dient **nur so weit** zur Cirkulation d. constanten Kapitals **als** d. *Werththeil* d.

Consumtionsmittel, der d. constanten Kapitaltheil dieser Productionssphäre darstellt, ausgetauscht werden muß gegen seine *Productionsmittel*, worin sich V+M in den Productionssphären d. constanten Kapitals selbst darstellt.“ (Kapital, II. Ms.II. S.183.) 「労賃および剰余価値のために前貸しされた貨幣が不変資本の流通のために役立つことができるのは、ただ、消費手段のうち、この生産部面の不変資本部分を表わす価値部分が、不変資本の生産諸部面における V+M を表わしている、その生産手段と交換されなければならないかぎりでのことである。」

- (10) „Zwischen a, b1) u. b2) findet **nur so weit** Cirkulation statt, **bis** Ca in natura ersetzt u. (V+M) (b1 u. b2) in Consumtionsmitteln a realisirt sind.“ (Kapital, II. Ms.II. S. 195.) 「a, b1) および b2) のあいだで流通が生じるのは、ただ、Ca が現物で補填され、(V+M) (b1 u. b2) が消費手段 a に実現されるまでのこととしかない。」
- (11) „Pm u. A unterscheiden sich hier **nur so weit, als** Pm in d. Hand seines Käufers=W'sein kann, d. Akt G_Pm, also für ihn=W'_G', wenn Pm d. Waarenform seines Kapitals, sein Kapital in d. Form v. Waarenkapital ist, während A f. d. Arbeiter stets nur Waare ist u. erst Kapital wird in d. Hand d. Käufers, als Bestandtheil von P“ (Kapital, II. Ms.V. S.37.) 「Pm と A は、ここではただ、次の点において区別されるにすぎない。すなわち、Pm は、それが買い手〔「売り手」の誤記であろう——引用者〕の資本の商品形態であり、彼の資本が商品資本の形態にある場合には、彼の手のなかで W' でありうる、つまり〔買い手にとっての〕G_Pm という行為が彼にとっては W'_G' でありうるのにたいして、A は、労働者にとってはいつでもただ商品であるだけであって、買い手の手にはいつてはじめて、P の成分として資本になるのである。」
- (12) „D. Kreisläufe P...P u. W'...W' stellen sich selbst **nur so weit** als G

...G' dar, **als** die Bewegung v. P u. W' zugleich *Accumulation* ist, also zuschüssiges G, Geld in Geldkapital verwandelt wird.“ (Kapital, II. Ms.V. S.50.) 「循環 P...P および W'...W' がそれ自身を G...G' として表わすのは、ただ、P および W' の運動が同時に蓄積であり、したがって貨幣が貨幣資本に転化させられるかぎりでのことである。」

- (13) „Wenn man Adam keinen Vorwurf machen kann in dieser Analyse **nur so weit** gegangen zu sein **als** alle seine Nachfolger (obgleich er einen Ansatz zum Richtigen schon bei den Physiokraten vorfand), so verläuft er sich dagegen weiter in einem Chaos, u. zwar hauptsächlich, weil seine „esoterische“ Auffassung d. *Waarenwerths* überhaupt fortwährend durchkreuzt wird von *exoterischen*, die in der Breite bei ihm vorwiegen, während sein wissenschaftl. Instinkt von Zeit zu Zeit den „esoterischen“ Standpunkt wieder erscheinen lässt.“ (Kapital, II. Ms.VIII. S.10.) 「この分析でアダム〔・スミス〕が、ただ、彼のすべての後継者が進んだのと同じところまでしか進まなかった（正しいものへの萌芽がすでに重農学派にもあったにもかかわらず）ということは非難できないとしても、彼はさらに混沌のうちにさまよっているのであって、しかもその理由は主として、商品価値一般に関する彼の「奥深い」見解がたえず皮相的な見解と交錯していて、ときには彼の科学的な本能がふたたび「奥深い」立場を現わすこともあるとはいえ、皮相的な見解のほうがより大きな紙幅を占めているということにあるのである。」
- (14) „Dies ist nicht nur unverträglich mit d. *kapital. Production* ...; bei d. *natürlichen jährlichen Wachstum d. Bevölkerung* könnte einfache *Reproduction* **nur so far** stattfinden **als** etwa von d. 1500m *successiv mehr unproductive Dienstler mitzehrten*.“ (Kapital, II. Ms.VIII. S. 70.) 「このことは、資本主義的生産とは両立しないだけではない……。毎年人口の自然増がある場合には、単純再生産が行なわれうるのは、ただ、1500m の分け前にあずかっていっしょに消費する不生産的な僕婢

が次々と増加していくかぎりでのことである。」

- (15) „Während in der *Profiträte* der Mehrwerth berechnet wird auf das Gesamtkapital — unabhängig davon, wie weit die fixen Bestandtheile viel od. wenig Werth periodisch an das Product abgeben — ist für den *Werth jedes periodisch erzeugten Waarenkapitals* der fixe Theil des constanten Kapitals **nur so weit** zu berechnen **als er durch** Verbrauch on an average *Werth an das Produkt selbst* abgiebt.“ (Kapital, II. Ms.VIII. S.71.) 「利潤率では——固定成分が周期的に生産物に交付する価値の多少にかかわらず——剰余価値が総資本にたいして計算されるのにたいして、周期的に生産されるそれぞれの商品資本の価値については、不変資本の固定部分は、ただ、その消費によって平均的に価値を生産物そのものに交付するかぎりでは、参入されるべきものである。」

この nur so weit..., als... という句の構造は、nur so lange ..., als という句の構造と基本的に同一である。この nur so lange ..., als という句も、マルクスの書き物のなかから次の12例が検出された。

- (1) „An meinem Rock habe ich **nur so lange** Privateigentum, **als** ich ihn wenigstens verschachern, versetzen oder verkaufen kann, [**als** er verschach]erbar ist.“ (Die deutsche Ideologie. MEW Bd. 3, S. 211.) 「私の上着において私が私的所有をもっているのは、少なくとも私がそれを商いしたり、質に入れたり、売り渡したりすることができるかぎり、つまり [それが商い] されうるものであるかぎりにおいてのみである。」
- (2) „Mit einem Wort, Grundrente, Profit etc., die wirklichen Daseinsweisen des Privateigentums, sind *gesellschaftliche*, einer bestimmten Produktionsstufe entsprechende *Verhältnisse* und „*individuelle*“ **nur**

so lange, als sie noch nicht zur Fessel der vorhandenen Produktivkräfte geworden sind.“ (Die deutsche Ideologie. MEW Bd.3, S. 212.) 「一言で言えば、地代や利潤等々、私的所有の現実的な定在諸様式は、一定の生産段階に対応する社会的な諸関係であって、ただ、それらが現存の生産諸力の桎梏にまだなっていないあいだだけ、「個人的な」諸関係なのである。」

- (3) „Auf diese Weise hat Jeder **nur so lange** den Besitz einer Eisenbahnaktie, **als** er „das Ich“ der Direktion „in sich trägt“, wonach man also nur als Heiliger eine Eisenbahnaktie besitzen kann.“ (Die deutsche Ideologie. MEW Bd.3, S. 341.) 「この仕方では各人は、ただ、彼が鉄道経営首脳部の「自我」を「自分のうちにもっている」かぎりにおいてのみ、鉄道株を占有している。つまりこれによると、ひとはただ聖者としてのみ鉄道株を占有しうる。」
- (4) „In demselben Maße, worin sich die Bourgeoisie, d.h. das Kapital, entwickelt, in demselben Maße entwickelt sich das Proletariat, die Klasse der modernen Arbeiter, die **nur so lange** leben, **als** sie Arbeit finden, und die **nur so lange** Arbeit finden, **als** ihre Arbeit das Kapital vermehrt.“ (Manifest der kommunistischen Partei. MEW Bd.4, S. 468.) 「ブルジョアジーが、すなわち資本が発展するにつれて、プロレタリアート、つまり近代労働者の階級も、それだけ発展する。この近代労働者は、ただ、働き口にありつくあいだだけしか生きられず、そして彼らの労働が資本を増加させるあいだだけしか働き口にありつけない。」
- (5) „So sprengten sie selbst den Hintergrund, worauf ihre Partei sich als eine Macht abhob, denn **nur so lange** kann das Kleinbürgertum eine revolutionäre Stellung gegen die Bourgeoisie behaupten, **als** das Proletariat hinter ihm steht.“ (Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850. MEW Bd.7, S. 35.) 「こうして彼らは、それあればこそ、彼らの党派が一勢力として瞭然と人目をひいていたその背景をみずから

破碎した。というのは、小ブルジョアジーがブルジョアジーにたいして革命的立場を維持しうるのは、ただ、プロレタリアートがその背後にあるあいだでしかないのだからである。」

- (6) „So werden sie die Eklektiker oder Adepten der vorhandenen sozialistischen Systeme, des *doktrinären Sozialismus*, der **nur so lange** der theoretische Ausdruck des Proletariats war, **als** es noch nicht zur freien geschichtlichen Selbstbewegung sich fortentwickelt hatte.“ (Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850. MEW Bd.7, S. 89.) 「そこで彼らは既存の社会主義諸体系の、つまり空論的社会主義の、折衷者ないしは信奉者となる。が、この空論的社会主義が彼らの理論的表現だったのは、ただ、プロレタリアートがまだ自由な歴史的な自主的運動をするほどに発達していなかったあいだだけだったのである。」
- (7) „Man weiß dagegen, daß in der That die *Erhaltung*, und so weit die Reproduction des Werths der Producte vergangner Arbeit *nur* das Resultat ihres Kontakts mit der lebendigen Arbeit ist, und zweitens, daß das Commando über Surplusarbeit grade **nur so lange** dauert **als** das *Capitalverhältniß* dauert; das bestimmte soziale Verhältniß, worin die vergangene Arbeit der lebendigen gegenübertritt.“ (Kapital, III. Ms.I. MEGA, II/4.2, S.468-469.) 「ところが、だれでも知っているように、じつは過去の労働の生産物の価値の維持は、そしてそのかぎりではこの価値の再生産は、ただ、それらの生産物と生きている労働との接触の結果でしかないのであり、また第2に、過去の労働の生産物が剰余労働に命令するということが続くのは、まさにただ、資本関係、すなわち、過去の労働が生きている労働に対立しているという一定の社会的関係が存続するあいだだけなのである。」
- (8) „Er hat also wie den Mehrwert, den wir einstweilen nur als Konsumtionsfonds des Kapitalisten betrachten, so den Fonds seiner eignen Zahlung, das *variable Kapital*, produciert, bevor es ihm in der

Form des Arbeitslohnes zurückfließt, und er wird **nur so lang** beschäftigt **als** er ihn beständig reproducirt.“ (Das Kapital, I. MEGA, II/5, S.458.) 「つまり、彼〔労働者〕は、われわれがしばらくはただ資本家の消費ファンドとしか見ない剰余価値を生産するのと同様に、自身への支払のファンドである可変資本をも、それが労賃のかたちで彼の手へに環流してくるまえに生産しているのであり、しかも彼は、ただ、たえずこのファンドを再生産するかぎりでのみ使用されるのである。」

- (9) „Werden die 60 £ Mehrwerth als Reventü verausgabt, so werden sie *aus dem Kreislauf des Kapitals abgestossen*, worin sie **nur so lange** hausten, **als** es die Form des Waarenkapitals besaß.“ (Kapital, II. Ms.II. S. 12.) 「60ポンド・スターリングの剰余価値が収入として支出されれば、それは資本の循環から突き離されるのであって、それがこの循環のなかに住み着いているのは、ただ、資本が商品資本の形態を持つ続けているあいだだけなのである。」
- (10) „Dasselbe Geld (50£) wird auf s. 2t. Stelle — in d. Händen d. Arbeiters — Geldform v. Reventü, d. Werths s. Arbeitskraft, od. d. realisirt. Preises s. Arbeit, aber es ist dieß **nur so lange, als** er es *nicht ausgegeben* hat.“ (Kapital, II. Ms.II. S.175.) 「同一の貨幣 (50ポンド・スターリング) が、その二番目の場所では——労働者の手のなかでは——、収入の貨幣形態、つまり彼の労働力の価値の、あるいは実現された彼の労働の価格の貨幣形態となるが、しかしそうであるのは、ただ、労働者がこの貨幣を支出していないあいだだけのことである。」
- (11) „Eine d. *variablen Kapital* gleiche *Geldsumme* bildet seine *Einnahme*, hence seine *Revenu*, die **nur so lange** dauert, **als** er seine Arbeitskraft an den Kapitalisten verkaufen kann.“ (Kapital, II. Ms.VIII. S. 10.) 「可変資本に等しい貨幣額が労働者の受け取り分をなし、したがって彼の収入をなすのであるが、この収入は、ただ、彼が自分の労働力を資本家に売ることができるあいだだけ続くのである。」

- (12) „Die *Versilberung* findet nur statt durch d. *Verkauf v. I*, u. dauert jedesmal **nur so lang, bis** das durch Verkauf v. 500 Waare eingelöste Geld nicht von neuem in Consumtionsmitteln verausgabt.“ (Kapital, II. Ms.VIII. S.26.) 「この貨幣化は、ただ、Iの販売によって行なわれるのであって、それが持続するのは、いつでも、ただ、500の商品の販売によって得られた貨幣がまたあらためて消費手段に支出されていないあいだだけのことである。」

以上のところから明らかとなったのは、少なくともマルクスについて言うかぎり、彼が **nicht so weit ... , als ...** ないしそれにたぐいする表現を使っているケースを見つけることができなかったのにたいして、**nur so weit** (または **so far** ないし **so lange**) **... , als ...** という言い回しは、彼のごく普通の口調であった、という事実である。

もちろん、このことから、当該の箇所では彼が **nie so weit ... , als ...** という表現を使うことはありえない、という結論を引き出すことができるわけではない。しかし、当該の箇所でも、彼が **nie so weit ... , als ...** という、ほかで彼が使っているのを見つけることができなかったような表現を使った蓋然性よりも、**nur so weit ... , als ...** という彼がごく普通に使っていた表現を使った蓋然性のほうがはるかに高いことは誰しも否定できないところであろう。そして後者の蓋然性がはるかに高いということは、草稿でマルクスが **nur** と書いていたことを認めるとしても **nie so weit ... , als ...** と書くべきところを彼自身が **nur so weit ... , als ...** と誤記してしまったのではないか、といった推論がなりたちがたいこと、ここで彼は、ほかでしばしばそうしたように、**so weit** を **nur** で限定したのであって、**nur** と書くべくして **nur** と書いたのだ、と見るべきことを示唆しているのである。

むすび

以上、本稿では、『資本論』第2部のエンゲルス版注32のなかに見られる nie という語はマルクスの草稿では明らかに nur であること、そしてこの語を含む nur so weit ..., als ... という表現は、マルクスがごく普通に使用していた言い回しであって、エンゲルス版でのような nie so weit ..., als ... という表現は、それをマルクスが使っているのをみつけることができなかつたような言い回しだったということを示した。

これによって、筆者が当該の一語を勝手に nur だと断定して議論をしている、という富塚氏の非難についても、CD-ROM 版によって見れば当該の一語は nie としか読めない、とする大村氏や大野氏の判断についても、すでに決着がついたと考える。ただ、言うまでもなく、この箇所が nur so weit ..., als ... であるとして、そのように訂正して読んだ場合、注32の当該の文章はその前後の文脈のなかでどのように理解できるか、されるべきか、という問題、すなわち理論的にのみ論じられることのできるこの問題はまだ残されているのであって、これについてはいずれ立ち入って論じたい。

なお、前述したように、研究者の会は『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第41号で例会の様相を紹介するさいに、関連する筆跡の画像を収めた CD を添付して「問題の所在を会員全員に分かるようにする」準備を進めることになったとのことである。この CD 添付は筆者も歓迎するところであって、そこでの画像を本稿での画像とつきあわせることによって、本稿での筆跡解析が、さらに確実な証拠力を得ることになるものと確信している。

最後に一言。日本 MEGA 編集委員会の内部で nie か nur かをめぐる議論が生じたのは、びわこ会議における大村氏の発言によってであり、氏らによるその後の委員会外部での筆者批判が筆者に本稿を執筆させる動機と

なったのであって、筆者の側から大村氏にたいしてこの問題について触れたことはまったくなかった。そのかぎり、この問題について委員会内部での議論を外部にもちだすという遺憾な事態が生じたのは、大村氏らの一方的な行動によるものであって、筆者のまったくあずかり知らぬところである。それにもかかわらず、どのような問題をめぐってであれ、MEGAの編集・刊行という重要な課題を担っている日本MEGA編集委員会の内部に、編集者相互の信頼関係を動揺させるかのような非難の応酬が生じ、しかもそれが外部にまでもちだされるという事態が生じたことそれ自体については、そのような事態が生じないような委員会内部の強固な信頼関係を築くことができていなかったという点で、同委員会の代表である筆者に大きな責任があるものと考えており、筆者の至らなさによるものと、深く反省している。筆者のこの反省を明らかにすることによって、筆者は大村氏らに、この論争をこれ以上こじらせるようなことなく、むしろ今回のことを奇貨とし、互いに協力し合ってMEGA編集という共同の目標のためにさらに努力しようではないか、と呼びかけておきたい。

(2004年1月9日)

“Never (nie)”, or “Only (nur)”
 — An Analysis of Marx’s Handwriting and a Survey
 of the Passages in Marx’s Works —

Teinosuke OTANI

《Abstract》

In the Engels’ edition of Book II of Marx’s *Capital* there exists a famous passage relating to the so-called “inherent contradiction between production and consumption.” That is, “Production potentials can *never* (nie) be utilised to such an extent that more value may not only be produced but also realised.” This text has long been regarded as a material evidence to proof that Marx would discuss the contradiction in the third section of his *Capital* Book II. However the word “never (nie)” in this passage was deciphered as “only (nur)” by experts of Moskow. Thereby the meaning would be completely reversed: “Production potentials can be utilised *only* to such an extent that more value may not only be produced but also realised.”

In this article the author analyses Marx’s handwriting of the word in question and concludes that it can be read just only as “only (nur)”. Besides the autor makes out that Marx used the expression “*only* such an extent that ... (*nur* so weit ..., als ...)” frequently, but it is hardly possible to find in his works the expression “*never* ... such an extent that ... (*nie* so weit ..., als ...)”.